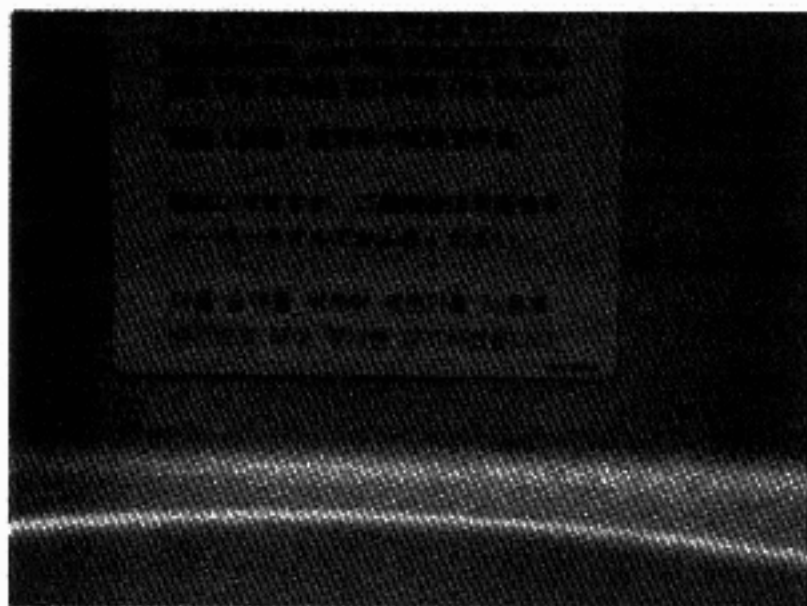


グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月24日 - 4月4日)

高槻市立椋田小学校 教諭 毛利 貞喜

3月24日(土) 初めての海外旅行。研修旅行とはいえ、期待に胸をふくらませて機上の人となる。しかし、言葉のことが脳裏から離れず、不安も増大してくる。乗務員の中に、日本人の方がいらして、何となくほっとする。

国際線は座席が広いものと勝手に思いこんでいたが、エコノミークラスなので、狭く、足下に置いた手荷物が大きすぎた。必要最小限のものにすべきであった。機内食はライスが外米であったが全体的にまあまあの味だった。時間がたつにつれて、足下から冷え込んできた。トイレには英語、中国語、日本語、韓国語での注意書きがあった。それを見ていて、おもしろいことに気がついた。



韓国語は全く理解できないのでおいておくとして、英語と中国語には「fellow passenger」「他人」のためにペーパータオルで拭くようにと、「他者」の存在を明確にしているのにたいして、日本語表示にはそれがないのである。他の言語との関連で言うならば、「恐れ入りますが」の表現はなくてもいいので、「次の方のために」は、ほしいところである。

こんなことを考えながら、少しばかり眠ったと思ったら、デトロイトに到着した。日付変更線を越えた際には、フライト時間をさほど長くは感じなかったことに驚いた。

デトロイトの気温、華氏32度。摂氏だと0度だそう。ここで、ラレー行きに乗り換えであるが、その前に、入国審査と通関手続きをしなければならない。不

安がっている時森田先生から、入国目的を聞かれたら「斉藤寝具店」と言うおまじないの言葉を教えてもらった。しかし、団体なので何も聞かれず、ほっとしていたら、通関の時、あまりの荷物の多さに呼び止められてしまった。何か聞かれたが理解できず、他の先生に助けを求めようとしたが、先に通過した人が逆戻りすることはできないと制止されているのを見て、ますます心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。「中身は何かと聞かれている」と言う天の声で、とっさに「マイクローズ」と応えると、係官は「ユア クローズ」とため息混じりに言いながら、通してくれた。これから先が思いやられると思っていると、「これで、入国手続きは完了ですよ。」と、教えてもらって、一安心。

ラレーまでのジェット機の中では、若い黒人女性と隣り合わせになった。ガムを勧めると、にっこり笑って、受け取ってくれたので、何となくうれしくなる。英会話ができないという不安がこんなささやかなことから、少しずつ薄れていくのを感じる。単純と言えなくもない。

ほどなく、ラレーに到着。スペンス先生とウォーカー先生の出迎えを受ける。ウォーカー先生とは6月にお会いして、英語混じりの日本語で話したこともあって、懐かしさがこみ上げてきた。

ウォーカー先生のバンと米川先生がレンタルした車の二台で、今度はウィルミントン市に向けて移動。途中、ハンバーガー店に立ち寄る。これが今日の夕食と思うと、なんだかわびしくなる。



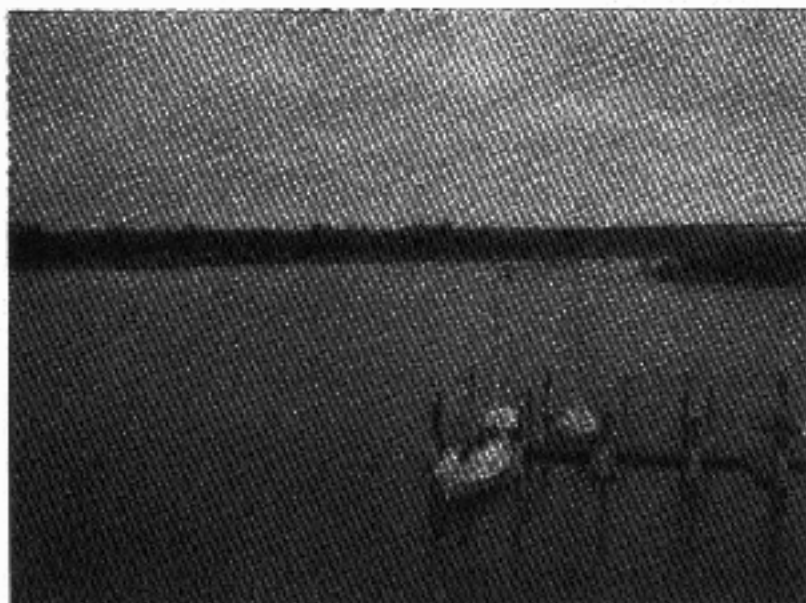
夕食後、少しばかり走ると、ウィルミントン市内に入った。宿舎に着いてからでは飲み物などの調達は無理なため、ショッピングセンターにて買い物。日本と違って、単品でなく、ある程度の数にパッケージされて販売されているものがほとんどである。

アメリカ東部時間3月24日午後11時 しばらく滞在することになるCoast Line Innに到着。チェック・インして、カード式のキーを受け取る。が、mouri, moriの名前で混乱する。しかし、すぐに訂正して再発行をしてくれた。出鼻をくじかれるのはいつものことと、さほど気にすることもなく、部屋に入る。まず、窓からの眺めを見るが暗くて見えず。でも、視界を妨げるものは何もなく、夜明けが楽しみになった。部屋の中の設備を一通りチェック。なかなかの部屋である。出発前の直前研修で使った部屋の居住性の悪さは、この部屋の引き立て役だったのかと、納得する。

森田先生の部屋で、無事に到着した祝杯をあげる。ほっとすると同時に、明日からのことを思うと緊張して、飲む気がなかなかかわかず。ちびりちびりやっていると、明日から、小学校のグループには、通して通訳のボランティアがつくとのこと。それを聞いて安心して、一気にペースがあがり少し飲み過ぎてしまった。そのため、米川先生の自宅への電話で広島で地震が起きたことがわかったことも、自分の部屋に戻ったときの様子も全く覚えていなかった。

3月25日(日) 目を覚ましたら、12時。何かひどく焦ってしまった。とにかく、荷物の収納と、シャワーを浴びることにした。

シャワーのレバーが一つなので使い方がわからず、やけどをしないように気をつけて、いろいろ試してみた。やはり風呂の方がいい。



さっぱりしたところで、あらためて眺望を確かめる。なかなかの眺めである。

ウォーカー先生のヴァンで、市内観光。昨夜はわからなかったが、市内の雰囲気そのものが、とにかくすばらしい。教会が多いと言ったら、日本だって、一つの町にお寺がたくさんあるではないかと言われ、何となく納得。

市内を抜けて、ビーチまでドライブ。大西洋だ。記念の貝殻を拾う。太平洋のより、厚みのある貝殻。遠くに、ハリケーンで壊れた栈橋の修復中。

大西洋、ハリケーン。ここは確かに、アメリカだ。

次に、ウォーカー先生の大学を案内していただいた。境界がなく、何か保養地といった風景であった。

その後、オフィスデポという名の事務用品専門店で買い物をし、コウノトリがたくさんいた公園をドライブして、宿舎に戻った。

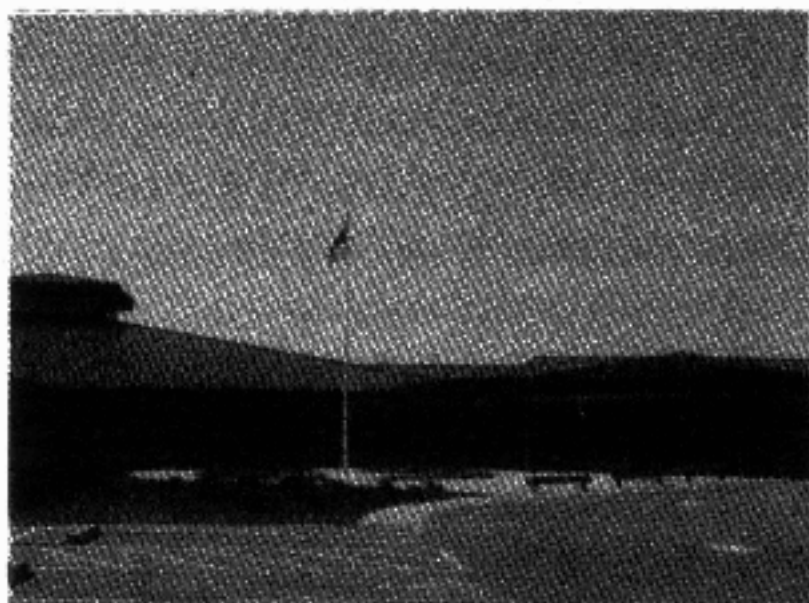
この日の夕食は、河畔のレストランで、シーフード料理。こちらに来て、初めての食事らしい食事をとった。

宿舎に戻り、自宅に電話し、健康に過ごしていることを伝える。壺田小の校長とは、姉妹校協定について相談する。

洗濯、荷物の整理をして眠ろうとしたが、興奮状態が続いていたせいか、時差ぼけのためかはわからないものの、なかなか寝付けず、横になったまま読書で過ごした。

3月26日(月) 数時間の睡眠後、起床。支度をすませ、エントランスホールに行くと、すでに迎えあり。6月に来日予定のメドウ副校長。当地に留学後、アメリカの男性と結婚された通訳の矢野さん。

7時15分に出発し、約45分のドライブ。市街地の道路から、道なりに続いているハイウェイを疾走後、ウィ



ルアムソン小学校に到着。いよいよ始まるといった感じである。ホームページの写真で見ていたのよりも、学校の周りが広い感じで、中も新しい。玄関から入ってすぐがメディアセンター（図書館）。理想的な配置に感激していると、控え室に案内された。中には、コーヒーなどの飲み物のほか、フルーツまでも用意されていた。そこへ、昨年樫田小を訪問されたチャイルド先生とミラー先生が挨拶に見えた。そして、その日の見学の打ち合わせ。ネルソン校長とも挨拶をかわす。

とにかく、あわただしい一日の始まり。まあ、私の学校も朝はこんなものかな。校内の案内はPTA副会長のパーナムさんがやってくださるとのこと。日本ではこうはいかないだろう。

ジム（体育館）でのアッサンブリアワー。私たちのために歓迎式典を開いてもらった。紹介後、挨拶。他のメンバーは英語で挨拶をしていたが、私はもちろん日本語。声の大きさだけが取り柄の私。マイクは不要。通訳は必要。

ステージの子どもたちが「さくらさくら」の合唱で歓迎してくれた。不思議だったのは、ステージ正面の最前列に陣取った二人の先生の存在。子どもたちが騒ぎ出すと、その場で指導をする役割とはいえ、日本で



は考えられない位置取りである。

式典後、各教室の見学をして、カフェテリアでランチをとる。セルフサービスになっていて、アイスまである。味はまあまあであった。

昼食後、1年の先生に誘われて教室に行くと、日本のペンパルからの手紙を見せてくれた。数年前の手紙を大事に保管していて、日本からのお客が来たときに見せるとは、彼女なりの歓待の仕方に嬉しくなる。いつの間にか通訳なしで会話している自分に気づき、驚く。

2時45分、全校一斉下校。通学バスに向かう通路で子ども同士のけんか。授業中は、ちょっとしたことで、アシスタントティチャーに注意され、教室の移動は列になっての移動で、子ども同士のぶつかり合いなど皆無ではと思っていたので、トラブルを見てほっとする。この日は、4時頃まで滞在。



夕食はウォーカー先生のお宅のホームパーティに招待される。車の中から、地平線に沈む夕日を見ながら移動。ホームパーティの前に、その日の反省会。お預けを食らった何とかみたいだが研修が目的なので、これも仕方のないこと。

ウォーカー先生の信仰の関係で、アルコールはなし。しかし、奥さん手作りの料理が、とてもおいしく、家庭的雰囲気満ちたひとときを過ごすことができた。何か、良きアメリカンファミリーを見た思いがした。

睡眠不足が続いていたが、どうにか一日持った。だが、さすがに疲れていて、すぐに寝てしまった。

3月27日（火）前夜早く寝たため、体調はすこぶる元気。今日は、ミラー先生のクラスを中心に見学。一つの教室を長い時間観察したため、ミラー先生には相当のストレスをかけたかもしれない。が、私の方はお

もしろかった。特に、担任とアシスタントティーチャーの関係など、興味深く観察することができた。担任が教科指導中心であるのに対して、アシスタントティーチャーは宿題の点検、教室移動の引率と、担任以上にクラスの子どもにつきっきりである。そして、授業中の態度のチェックも、アシスタントティーチャーの仕事である。スイミーの劇の練習中にこんなことがあった。練習中に、ふざけた女の子がアシスタントティーチャーによって立たされた。その罰を許すことは、担任であってもできないのである。そこで、ミラー先生がとった態度は、その女の子が罰を受けたままで、なおかつ担任との人間関係を作り出すといったものであった。自分が弾いているオルガンの前にたたせ、楽譜を持つ仕事を与えたのである。その女の子と担任との信頼関係は、その笑顔を見れば、鈍い私にも理解できた。無理をお願いして、練習風景を見せていただいたので、ビデオやカメラは遠慮していたため、その場面の記録がないのが残念である。



宿舎に戻り、いつもの反省会を森田先生の部屋で行う。小、中、高のそれぞれについて報告しあう。中学での警官常駐のことや、高校で学外での仕事することが単位に認定される制度など、小学校の見学だけでは決して出会えないような話が諸々出てきて、この反省会の時間もなかなか楽しい時間になっていった。

夕食の前にビデオのテープを買いに米川先生に連れて行ってもらい、そこで、T. Cを使って払おうとすると、店員さんが不慣れだったようで、思った以上に時間をとってしまった。T. Cを使用した私が悪いのかと思うほどの混乱ぶりであった。日本では決して起きないようなことだなと少しばかりいらいらしていると、米川先生になだめてもらった。

3月28日(水) 宿舎の朝食のパンが口に合わないのので、昨夜のレストランで確保しておいたパンを食べる。焼きたてでないの今ひとつ。今日の朝の迎えはミラー先生だった。

通訳の矢野さんを介さなくても、家族のことなど、少しはコミュニケーションができた。車の中での沈黙の時間が減っただけで、いつもより何か早く着いた気がするから、おもしろいものだ。小学校について、玄関に入ると、昨日のあの女の子がミラー先生に抱きついてくる。

きのう、1クラスに張り付いたため、今日は1年生のどのクラスもまんべんなく回るようにとのスケジュール表をチャイルド先生が持ってきた。午前中、サービスにつとめた。ランチタイムは、例のあの女の子と一緒に食べようということで、ミラー先生の三人で食べた。午後はメディアセンターでの読み聞かせの授業、車いす利用の子どものコンピューターを用いての授業の参観と、バラエティのある内容だった。子どもたちが帰った後に、職員のミーティングに招待され、交流を持った。また、プレゼントの交換も行い、Thinking Mapもいただいた。いつもより宿舎に戻るのが遅くなり、6時半より8時までミーティング。イタリアンビストロで夕食。ピザもパスタも、そして、ビールもおいしかった。

3月29日(木) 朝方、足がつり、目が覚める。結局その後は眠らずに、夜を明かすことに。和服などのお土産の件で世話になっていたので、田舎の母に電話を入れた。距離を感じない電話に、お互いに感慨を覚える。(5月に母が急死したので、このときの電話が母と交わした最後の会話となる。)

ウィリアムソン小学校の最終訪問日。2年生のクラスで、袴姿で黒田節を披露した。アメリカの子どもの目に、どのように映ったかは不明。日本に対して固定的なイメージを与えていないことを祈るのみ。その後、ネルソン校長にインタビュー。昼食は、学校のすぐそばにあるゴルフ場のクラブハウスでごちそうになる。

2時15分から、体育館で全校生を集めて、チャイルド先生とミラー先生のクラスの子どもたちによる音楽劇「スイミー」の上演。二人の先生は、私の小学校で見たスイミーに比べて全然だめだと謙遜していたが、

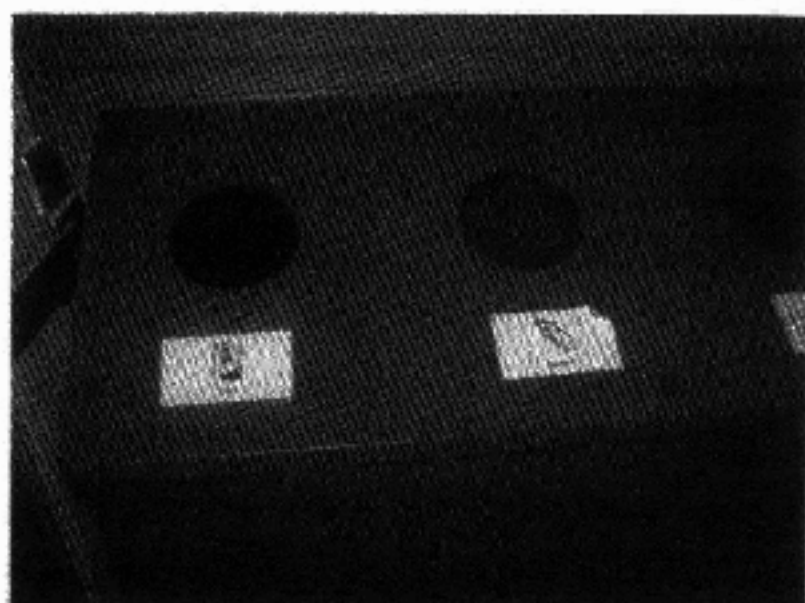


スイミー役のかわいさもあって、なかなかのできであった。日本で見たことに、今度は自分たちが取り組むという姿勢に、何よりも感激した。劇のあと、その場でネルソン校長の話があり、その後ウィリアムソン小学校を4日間に渡って訪問した私たち3名に学校名の入ったウインドブレーカーの贈呈があり、この場は終了した。この日は、6月に来日予定のペーカー先生に送ってもらった。



いつものミーティングを簡単に切り上げ、UNCWでのレセプションに参加。主催はウォーカー先生というわけではないだろうがアルコール抜きのパーティ。日本人の参加者一人一人が紹介を受け、英語での簡単なスピーチをした。なんとなんと、このわたしも、ブローケン・イングリッシュではあったが、通訳なしであいさつをした。周りの人よりも、当人が一番驚いた。その後は同席した小池先生と二人三脚で、掛け合い漫才よろしく、アメリカン・ジョークを連発し、そのできばえについて、ペーカー先生たちに批評をもらい、楽しいひとときを過ごした。いわゆる「会話に酔う」というのは、この時のようなことをいうのではないだろうか。

話は変わるが、アメリカでは、ゴミの分別収集はし



ないようで、訪問先の学校で空き缶と紙と一緒にゴミ入れに出すのが気になっていたのだが、レセプションの会場の横には分別のゴミ箱が設置してあり、やっているところではやっているんだなと納得。日本だって似たようなものかもしれないが。

宿舎に戻ってからは、本当のお酒で酔っぱらってしまい、途中居眠りをしつつも、明け方近くまで、討論と言おうか、四方山話に興じていた。4日間の学校訪問の疲れと、ミーティングが不消化に終わらざるを得ない日が続いたせいか、森田先生に愚痴ったり、八つ当たりをしたりで、多分な迷惑をかけてしまった。

3月30日(金) この日は、ウィルミントン市内での、教育関係施設のツアー。まず最初に訪問したのは、Williston Middle Schoolで、ミーティングの時に中学の先生に聞いていたとおり、玄関を入ると警官の詰め所があった。仕方ないかなと思いつつも、違和感はぬぐえない。ここでは、英語を母国語としない生徒たちの授業を見た。ウィリアムソン小学校でも感じたのだが、移民の子どもたちへの取り組みの丁寧さを感じた。

次は、Holly Tree Elementary Schoolを訪問した。学校中がカラフルな作品で飾られ、明るい雰囲気の小





学校である。保護者の関わりも大きく、私が聞き違えていなければ、年間、延べにして、2千時間のボランティアを受け入れているそうである。運動場の端にたてられていた建物も、保護者の手によるものであった。

またここでは、クラスに授業についていけない一人の子が、廊下に机を出して、先生と二人で学習しているのを見た。本人がどのように思っているのかはもちろん、周りの子どもたちのこの子への見方も知りたかった。しかし、駆け足見学なので、質問ができなかったのが残念だった。学力保障と人権の保障と両立させることの難しさは、アメリカでも日本でも同じ気がした。



次に、UNCWのウォーカー先生のゼミに参加させてもらった。何か久しぶりに、学生に戻ったような気分になり、言わなくてもいいのに、日本の子どもたちの学力実態のことで、誤解を与える発言をしてしまい、またもや森田先生に迷惑をおかけした。

アメリカでの滞在期間も折り返しを過ぎ、お土産の心配も少ずつし出さねばならなくなってきたところで、UNCW内の、日本の大学生協に似たお店で買い物をした。レジの機械の調子が悪かったのかも知れないが品物を選ぶ時間よりも支払う時間の方がずっと長くかかった。アメリカの方がのんびりしているとも思えな

いのだが。

今度は、「Teacher's Aid」という名の教師と保護者向けの教材店に行き、カラフルなシールや日本を紹介したテキスト類を購入した。日本人の服装などが中国風になっていたりして、アメリカ人には日本も中国も同じに見えていると思えた。同じ事は、日本人である私たちが、外国を見る時にも言えることかも知れないが。

この日の締めくくりはチャイルド先生のご主人の調理によるPIG PICKIN パーティー。子豚の丸焼きをつつき合う野趣味たっぷりの料理に舌鼓を打ちながら、会話を楽しんだ。アメリカ側の参加者は家族で参加の人が多く、メドウ先生の所は、ご主人とデトロイト在住の両親まで参加されていた。この4日間通訳でお世話になった矢野さんもご主人と参加され、仲のいいところを存分に見せつけてもらった。



3月31日(土) 今日にはホームステイ。この宿舎ともお別れ。支払いでT・Cを使うのに懲りていたの、散歩がてらに近くにあったヒルトンホテルまで行き、そこで現金に交換してもらった。我ながら随分と大胆な行動がとれるようになってきたと思った次第である。また、ホテル人たちの親切な対応にはすごく感謝している。

宿舎に戻り支払いを済ませて待っている時、ホームステイのホストファミリーがメドウ先生の家と聞いてほっとする。というのも、もともと英会話が苦手で、特に聞き取りができない私にとって、全く新しい人との会話は大変だからである。その点、メドウ先生とは当初、ほとんど聞き取れなかったのに、少しは意志疎通ができるようになってきていたからである。

ホームステイを受け入れるために、わざわざ遠いと

ころから両親を呼び寄せるといふ歓待ぶり、アメリカンライフを満喫させてもらった。日本を出国前にあわてて取得した、国際運転免許証も無駄にならなかったし、映画「イージー・ライダー」の主人公の気分も味あわせてもらった。中でも、南北戦争の激戦地跡に案内してもらったときには、みんな寡黙になり、私も目頭が熱くなるのを感じた。

4月1日(日) アメリカは今日からサマータイム。時計を一時間進めた。メドウ先生のご主人の粋な計らいで、集合場所である大学の構内まで、ハーレーダビッドソン送ってもらった。最後の最後まで、気を遣っていただいたことに、感謝の言葉もないくらいであった。



ウォーカー先生の車で、ラリーに移動。時間を惜しんで、車中でも論議。明日のサマリーミーティングにむけて、緊張感が高まってくる。食事の時間以外は、ミーティング漬け。

それぞれが学んだことを出し合いまとめていくわけだが、小中高と、学んだ対象の違いからくる微妙な温度差から、なかなかまとまらず、深夜2時半までかかって、ようやく煮詰まる。

4月2日(月) 2時間ほど寝ただけで、朝を迎え、最後の詰め。9時からサマリーミーティングが始まり、プレゼンテーションを行う。ノートパソコンのトラブルなどもあり、発表の一部を飛ばしてしまった。しかし、発表の中で「スイミー」にふれたこともあって、ミラー先生たちは満足してくれたようである。

ランチタイムに、ヴァージニア・ウィリアムソン小学校と樫田小学校の姉妹校協定書にネルソン校長とともにサインをした。6月の本調印前の仮調印とはいえ、一生一大の大舞台といった感じで、柄にもなく緊張し

た。

サマリーミーティング終了後、仮眠をとる。その後、州議会への表敬訪問。日本では考えられないが、夕刻から議会が開かれるので、開会のセレモニーに立ち会う。私たちのような傍聴者も含めて、全員が起立して、祈りを捧げ、星条旗に向かって手を胸の上に当て、誓いの言葉を唱和して、議会の開会となった。

聖書の一説を引用しての祈りの最中は、後ろを向いたり、書類にさわったりする議員もいて、信仰の自由は保障されている気がしたが、後半の星条旗に向かって全員が同じポーズで国家への忠誠を誓う場面では、多様性のアメリカにおける星条旗の意味の大きさを感じた。

いくつかの提案がなされた後に傍聴席の私たちが紹介され、スタンディングオベーションを受ける。

食事後、ホテルに戻って、メンバーで深夜まで、お酒を飲みながら討論をする。討論の内容はあまり覚えていないが部屋に戻って、ノートに次のようなことを書きとどめていた。「州議会の議事堂に教会があること、祈りで議会が始まること、星条旗への忠誠があること。このようにアメリカの出自を大切にすることでしか、多民族国家での国民としてのアイデンティティは保てない。これをなくすと民族的アイデンティティの方がメインになり、国家が崩壊する。そういう意味で、フォーマルを大切にすることは、アメリカ国家がヒスパニック系市民に対して厳しい視線を向けながらも、その子弟に対しては、特別な手だてまでして、力を付けようとするのは、民族的アイデンティティを保持するのを認めつつも、彼らにアメリカ市民としてのアイデンティティを共有させるためであると思う。アメリカという国家にとって、民族、人種が何であっても構わないのである。大切なのは彼らが国民=市民としての第二のアイデンティティを獲得できるかどうかなのである。教育の第一義的ねらいもそこにあるように感ぜられた。日本人がもしアメリカの中で嫌われるとしたら、それは他の民族、人種の人々と違って、アメリカで問題とされる第二のアイデンティティを曖昧ながらも最初から保持しているからではないだろうか。例として適不適はあるかも知れないが、日の丸・君が代に対して、賛成、反対のどちらの立場であっても、その立場性にこだわっている限りは、第二のアイデンティティを獲得することはできない。日本人であっ

でも、日の丸・君が代は自分とは関係ない存在であり、賛成、反対のいずれにもコミットする必要性を認めない人だけが、日系アメリカ人となれるのである。第二次世界大戦中に、アメリカにいた日本人は第二のアイデンティティを獲得した証を自分自身の血で、あがってきたのではないだろうか。

4月3日(火) 私立の博物館に併設されたExploris Schoolを見学する。案内も生徒。訪問者の案内そのものも教育の一環と位置づけられているそうである。駆

け足での見学だったので、雰囲気だけでしか見ていないのかも知れないが、どのクラスでも、生徒の自主性を尊重するとともに、目下、日本で展開されている「総合的な学習」の原型のような授業が行われていたことに感動を覚えた。可能であるなら、2、3日滞在して観察したいと思ったほどだ。

4月4日(水) 5時半起床。心地よい疲労感の中で、アメリカとも今日でお別れ。

「総合的な学習の時間」における 児童の自主性の尊重と教師の支援の関係

高槻市立榎田小学校 教諭 毛利 貞喜

(1) はじめに

アメリカ的な発想から言えば、市の中心部まで45分もあれば行くことができる学校が、どうして僻地指定の学校となるのかと言うところだろうが、私の勤務する小学校は、全校児童27名の僻地校である。地域の特性を生かした学習を学校あげて取り組んでいて、まさに、毎日、毎時間が「総合的な学習の時間」であるかのような学校である。

少人数故に、家族的な雰囲気恵まれているものの、そのことが逆に子どもの自主性を奪っていいいないだろうかと自問自答していたところに、今回のプロジェクトの話があり、広い視点で子どもたちを見つめ直し、私たちの教育を洗い直す機会になればと、期待を持っ

て参加していった次第である。

(2) 研究の概要

現地に行くまでの事前の研修では、下記のような研究内容を考えていた。

- ① メディア・リテラシーを育てる教育のあり方について
- ② 基礎学力を育てる指導のあり方について
- ③ 人権を大切にすスキル指導について
- ④ ディベートにおける教師の援助のあり方について
- ⑤ 地域連携のあり方（地域の教育力の活用、保護者との課題の共有化）

[現地調査の日程]

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関
3/26 (月) 8:00 2:45	Virginia Willamson Elementary School	用意していただいた控え室にて、ネルソン校長、チャイルド先生、ミラー先生の挨拶を受ける。 PTA副会長バーナムさんの案内で、各教室及び、学校内の施設の見学。 体育館での歓迎式典に参加。 カフェテリアにて昼食 午前中に引き続き、授業の参観。 スクールバスによる下校に立ち会う。	VWES 1020 Zion Hill Road Bolivia, N.C.28422. Tel (910) 754-8660
3/27 (火) 8:15	Virginia Willamson Elementary School 階段教室	ダイレクトインストラクションによるリーディングの授業を参観 ミラー先生のクラスを中心に授業の参観 Science・Comm. Skills・Resource Writing スイミーの練習を見学 校内を一人でビデオ撮影	※1
3/28 (水) 8:15	メディアセンター	ダイレクトインストラクションによるリーディングの授業で、能力別編成のクラスを参観。	※2

9:30	1年生の教室	チャイルドの先生がたてたスケジュールに沿って1年生の各クラスを参観。	※3
11:15	メディアセンター	メディアコーディネーターにインタビュー。	
12:45	メディアセンター	本の読み聞かせを見学。	
13:30	ミラー先生の教室	地図、写真をもとに榎田小学校の紹介。	
14:05	ウィリアム先生の教室	車いす使用の「障害」児に対するコンピューターを利用した学習を参観。	
15:00	メディアセンター	教職員のミーティングに招待され、交歓。	
3/29 (木) 9:30 11:00 11:45 13:15 14:15 19:00	2年生の教室 2年生の教室 体育館 UNCW	紙芝居(桃太郎)の読み聞かせ、黒田節の披露、のあと、子どもたちへのインタビュー。 ネルソン校長にインタビュー 小学校のすぐそばにあるゴルフ場のクラブハウスで校長による昼食の接待を受ける。 午前中と同様の取り組みを実施。 ミラー先生とチャイルド先生のクラスの児童による劇「スイミー」を見学。 レセプション	※4
3/30 (金) 8:30 5:30	Wilmington市内 UNCW UNCW構内	Williston Middle School Hollytree Elementary Schoolを見学。 ウォーカー先生のゼミに参加。 Pig Pick in	
3/31 (土)	Wilmington	メドウ先生のお宅に、ホームステイ	
4/1 (日) 11:00 7:00		ラレーに移動 今回のプロジェクト参加者全員で食事	
4/2 (月) 9:00 19:00		サマリーカンファレンス 昼食の席で、榎田小とVWESの間で姉妹校協定の仮調印。 州議会を表敬訪問	
4/3 (火) 8:30		Exploris Schoolの見学。その後、その学校の生徒さんに博物館の中を案内してもらう。 自然科学博物館の見学。 教育委員会の地下にある教材等の書籍売り場を見学、資料の購入。	

(3) 研究の結果と考察

アメリカに行く前に考えていた研究内容が広範囲に及び、焦点化できていなかったために、現地での調査も曖昧さがあり、研究の結果と考察というには、お粗末という誹りも、免れないことを承知で、インタビューしたことを中心にまとめたいと考えている。

現地調査の二日目、ミラー先生のクラスを長時間かけて、観察することで、多くの示唆を得ることができた。二時間目、理科の時間で、教室にあるものを「生物」と「非生物」に分類していくことに始まり、あらかじめ出されていた宿題をもとに、自分の調べた「生物」と「非生物」を発表しあっていた。その後、レオ

＝レオニ（「スイミー」の作者）の「アレクサンダーとぜんまいねずみ」の読み聞かせ。声の強弱、読みの速度にも変化がつけられ、随所で質問を入れ、児童が読みを深める工夫がなされていた。次に、この話を4つの視点で簡単にまとめ、それを板書。その板書の仕方は、シンキングマップの形式が利用されていた。日本での合科、あるいは生活科的な授業に近いがテンポ良く進められ、途中、ほとんど休憩もないのには驚かされた。（※1）

基礎学力をいかに付けていくか、とりわけ、低学力の児童の学力保障をどうはかっていくかはウィリアムソン小学校においても重点課題らしく、全体に基礎学力をつけるべく学校全体で朝一番に取り組まれているダイレクトインストラクションによるリーディングの授業は、能力別のクラス編成がなされていた。一つのクラスの中で理解の高い児童と低い児童に分けるだけでなく、特に理解力の高い児童ばかりの抽出クラスがある一方で、低学力の児童の抽出クラスもあった。その抽出クラスの低学力の児童を人目にさらさない配慮のためということであったがそのクラスの授業はメディアセンター（図書館）の小さな一室で行われていた。チャイルド先生の話によると、ここで対象となる児童は、保護者の放置により、言葉の発達が遅れたり、家庭内暴力によるトラウマや、幼児期の栄養不足などによる発達障害を受けている場合が多いとのこと、日常生活の会話での課題を有する児童もいるとのことであった。抽出するにあたっては、テキストは他のみんなと同じものにしたりして、児童自身にみんなと区別されているという感覚を極力持たないようにしていったとのこと。しかしながら、学年があがるにつれて、だんだんわかりだしてくることは否めないとのこと。ただ、その場合でも、抽出クラスのドアさえ閉まっていた、他の児童に見られなければいいと妥協している子がほとんどであるとのことであった。

私自身、以前勤務していた学校で、抽出授業の経験があり、同じような悩みを持ったことがあるので、児童の人権と学力保障の兼ね合いの困難さを改めて感じた。（※2）

日本における学校教育もIT革命ということで、イ

ンターネットの活用が叫ばれ出したが、ハード面と、操作技術の習得に偏りすぎた嫌いがなしともいえない。そこで、アメリカにおけるメディア・リテラシー教育から多くのものを学びたいと考えていた。ウィリアムソン小学校を最初に訪問した時、玄関ホールに入ってすぐの所にメディアセンターがあり、校舎の配置上も、まさに学校の中心に位置することに、驚きもし、感激もした。また、メディアコンダクターの存在がセンターとしての機能上、欠かせないこともインタビューをして痛感した。というのは、メディアセンター抜きには学校の存在が考えられないようなものにしていきたいという意気込みを持って仕事をされ、メディア・リテラシーを子どもたちにつけていくためにはと、常時考えて活動している人の存在は重要と思えるからである。（※3）

ウィリアムソン小学校での最終日、ネルソン校長に、包括的なインタビューに答えていただいた。（※4）

Q：ウィリアムソン小学校の最重点課題は？

A：児童が将来、成功できるように準備をさせること。

Q：校長の任務は？

A：すべてですが、教師を雇ったり、予算集めをしたり、授業を見たりです。

Q：現在、アメリカでもっとも関心の高い教育問題は？

A：誰に対しても、よい教育を受けられる機会を与えるということです。

Q：人権教育における配慮について？

A：学校によっては、いろいろな国から来た子がいる。社会科の中で、その子らの国の歴史、習慣を教えて、誰もが尊敬して、敬意を払えるようにしていくこと。

Q：児童の差別的な言動に対する教師の対応は？

A：そういうことはある。他の人の権利を指導し、許されることと許されないことを教えていき、白人と黒人の違いなど、お互いの違いについても理解させていく。

(4) 今後の展望

ウィリアムソン小学校のチャイルド先生とミラー先生が今年の6月に、榎田小学校を訪問された際、子ど

もたちは全校で取り組んでいた音楽劇「スイミー」を披露して、歓迎した。そして、今回、二人の先生は、その時の返礼として、自分たちのクラスの子どもたちによる音楽劇「スイミー」でもって、私たち訪問者を歓迎して下さったのである。その時、私自身も大いに感動したわけであるが帰国後、私から、このことを聞いた他の教職員、子どもたちはもちろんのこと、保護者までもが感激しておられたのである。

このような状況の中で、姉妹校協定の話も当初に予定していた流れよりも、速い進行を見せ、4月2日のサマリーカンファレンスでの仮調印、6月、鳴門におけるサマリーカンファレンスでの本調印となった。

今後、この姉妹校協定の内実化をはかることが重要であるが、この協定によって、今後の継続性が担保された意義は大きいと言えるのではないだろうか。小学校ということ、英語の学習をしているわけではなく、ことばの壁の高さを感じないこともないが、作品交流

をはじめとして、翻訳ソフトを活用してのEメールの交換も追究していきたいと考えている。

(5) おわりに

今回のプロジェクトに参加して、あらためて、アメリカは広いと痛感した。それは、単なる面積的なものではなく、多様さという意味においてである。今回訪問した学校が、たまたまそうであったのかもしれないが、私の目には、どの学校も日本の学校と違って個性的に見えたからである。具体的事例による考察が必要と思われるが、力量不足で未だに整理できていない現状では、感覚的な感想でしか述べられないことをわびるしかない。たとえ時間を要しても、学んだことを他の人たちとshareしていくことが、機会を与えてくださった人たちに応えていくことになることを肝に銘じて、今後とも努力していきたい。

ノースカロライナの中学校に見る、日米のちがい

ーグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加してー

高槻市立第一中学校 教諭 守 きみよ

1. はじめに

私はこのプロジェクトに参加して知りたいことは山ほどあった。大阪教育大は小、中、高の現場の教諭の興味関心、疑問、研究課題に対してあくまで主体的に取り組めるように側面からサポートして下さったことに非常に感謝している。自分ですべて考えなければいけないので他の研修よりはるかに厳しいけど、得るものも多いと思うと事前研修で言われた。

私は本当に日本で教育改革は欧米流をまねてできるのかかねがね疑問に思いながら、意識変革なくしてあるいは今までの日本の社会通念とは別の考え方を受け入れる姿勢と外のものまねでなく、日本の歴史や民族性をふまえながらも21世紀の新しい教育理念を作り上げていく姿勢がないとできないと思ってきた。私自身が戦後の民主教育を受け、高度成長時代をになうべく質の高い勤勉な労働者を大量に必要とした時代に育ち、田舎の、女性で、裕福でない家庭の人間でも、安い学費で大学を卒業し、結婚し、核家族で公共の支援で子育てをしながら30年間働きつづけてきた。

今、個性尊重、選択の時代と言われ、能力のある人間は国際社会でたちうちできるように力を更にのばし、その機会も与えられ、文化遺産を受けつぐそれぞれの達人もその伝統を継承し、個性をのばして将来リーダーシップを発揮できるような人材の育成が必要である。

また一方で健全な判断力と自立した生活力をもつ市民の形成が教育にもとめられるようになった。これが欧米型で、「違いをはっきりさせ、評価も客観式と面接法で本人にもフィードバックし明確にする」しかしそこで終わらず、到達目標に達しなければ厳しい措置をとるがその支援体制や施設が必ず準備されていることである。評価をあいまいにし、そのあとの支援体制には人も施設も準備されていないのが日本の現状である。

それが評価のありかたにも、生徒指導の対処の仕方にも現れている。

授業に対する評価も教師も生徒も明確にされ、そのかわり、教師は授業に専念することが第一優先で、「いかにいい授業をするか」「いかに生徒を授業に集中させ

るか」の指導力を最も評価される。従って、それ以外の公務は管理職や他の専門職があたり、問題発生時のコードも入学時に保護者に明確にして渡され、いかなる生徒も同じ処遇をうける。それが真の公平、平等であり、必要な支援は別途なされる。日本では担任がすべてにかかわり、家庭や、個人の問題も心情的な問題と混同され、対応にとまどう場合も多い。そのため、授業の秩序が崩壊されたまま放置されたり、教師の個人的な努力にまかせられたりする。授業中の私語が犯罪と同じくらい厳しい処置があり、授業中はどこもシーンとしているのがあたりまえ、日本の学校の授業妨害や多動、集中力のない生徒は校長室や他の部屋で課題を自習し、それでも改善されない場合は期限付きで郡で専門のケアに当たれるペンダーラーニングスクールという特別の学校がある。教護院ではないが通学のそのような施設である。それはとても興味深い学校であったのであとのべる。

これから変わっていく日本の学校がモデルにしようとしている欧米型の学校の一つとして、吸収できることは何でも吸収してやろうと思って4日間は一つの学校にじっくり居座り、教室にもどんどんはいっていき、飛び入りで生徒に授業もさせてもらった。研究としては深めるとこまでいかなかったが、貴重な教育実習のような日々だった。

2. Topsail Middle Schoolでの研修、参観を通して

1) コンピュータープログラムの活用

コンピューターが学校教育の随所に使われている。コンピューターは各教室にはもちろん、廊下にも設置され、コンピュータールームもいくつもあった。日本といちばんちがうのは教材は通常の授業や課外授業なども企業が専門に開発したプログラムをほとんど使っていることである。ハンドアウト（日本ではプリントという）などもインターネットからとる。ほとんどがフリーソフトウェアで、有料のプログラムなどは学校が買い取る。

読書指導もReading Renaissanceというプログラムに従って、本のグレードもComprehensionテスト（理解度チェック）もそれをつかうし、数学にもRiverdeepという日本からでもアクセスできるフリーソフトを使っていた。もちろんプログラムそのものを作る先生もいたが、それは販売もする。教材を作ることに労力を使わず、それを使って指導してどう実績をあげるか、結果を出すかに重点がおかれている。

〈Reading Renaissance〉

企業が開発した読書プログラム。

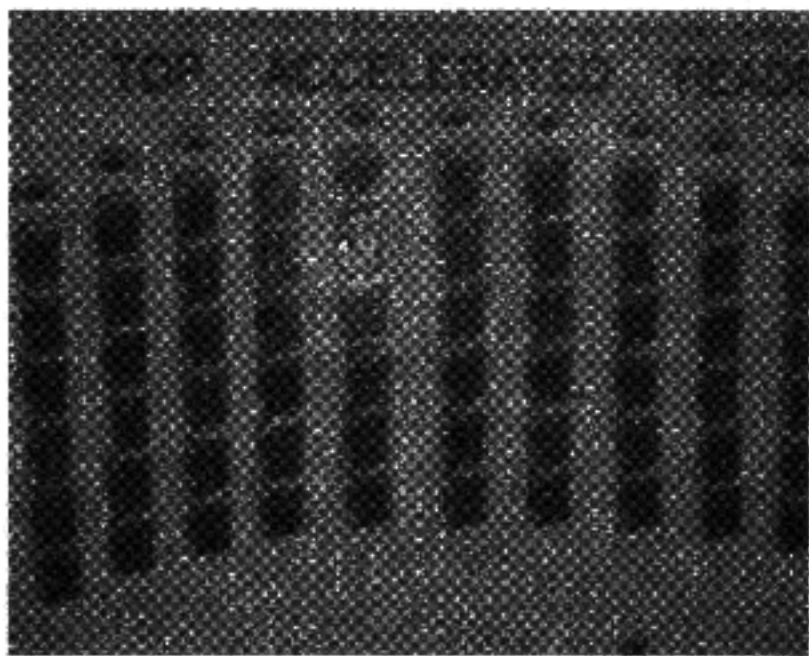
読書タイムは早朝30分。(サマータイムのため日本であれば7時20分に授業は開始される、毎朝ホテルに校長先生が7:00に迎えにくるが、6:00だったのだ。)

全校生徒を24のグループ、それぞれに一人の先生があたる。1時間目の部屋でやってる。各グレードの本のリストが提示され、その中から選ぶ。

図書館の司書がガイダンスにあたる。司書はカリキュラムも作る専門職、位置づけが高い。理解度点検テストが週1回ある。学年末の進級テスト（国数のみ）につながる。

先生の名前が一番上にかかれ、〇〇先生クラスは最高の△△君が何ページと張り出される。いわゆるペーパーボックス（日本の文庫本）、表紙の絵や文字からは興味をそそる本ばかりではない。本が指定されるのは日本では受け入れられるか、読解力の向上のためという目的がはっきりして客観的に評価するにはテストは必要。授業でやってる理解度テストはすべて記述式でむずかしかった。

本校でも読書タイムをとりいれているが、自由に本



何ページ読んだか記録し、廊下に多い順に掲示されている。

をもってきて読むことになっており、読解力をつけることを本気で取り組むならば、このようなプログラムと到達度を試すテストが必要だろうなと感じた。ページ数だけで競うのはやや抵抗があるが。

〈Riverdeep〉

数学、英語、社会など習熟度別にいろいろなアクセス方法があり、生徒が自主的に勉強できるようになっている。遅れている生徒はコンピューターでマイペースで理解をふかめたり、繰り返し学習することができる。

2) コア（必修）教科とウィール（選択）教科の実際の運用のしかた（時間割）

〈時間割〉

州や学校によってちがうのでいちがいにいえないが、私の行った学校は1時間が90分単位で2人の教師でT-Tを行い、4人で1チームを組むようになっていた。一人の先生が2つの教科の免許をもっている。ただし、教える学年は固定していて、持ちあがりはしない。

8:20	登校	
8:20~8:50	読書タイム	
Core Lesson（必修科目：国語、数学、理科、社会）		
	Ms. Miles	Ms. Gratale
	Group A	Group B
8:50~10:20	数学（90分）	国語
10:20~11:00	社会（45分）	理科
11:00~11:45	6年生 ランチタイム	
	Ms. Miles	Ms. Gratale
	Group B	Group A
11:50~12:45	数学（90分）	国語
12:45~1:30	社会（45分）	理科
1:30~1:50	マイルズ先生とグラティル先生のクラス休憩。	

6年生全員 選択授業に行く

Wheel Lesson（選択教科）

1:50~3:15	月、水、金（45分）	火、木、金
	選択 A	選択 B

（選択教科は美術、器楽、職業教育、体育、先生のアシスタントの5つ）

5つの選択教科のうち、2つを前期に、のこりのうち2つを後期に選択する

6年生が選択教科を受けている間、6年生チームの

先生はT-Tや個人の教案をたてたりしている。

7年生は大体同じ。

8年生はひとつの大きなチームで、5人の先生の授業のうち4つに移動する。A先生は社会、B先生は国語表現、C先生は数学と理科、D先生は国語と理科、E先生は数学と代数。

3学年のグレードのレベルは個々の生徒のレベル、ニーズにあうように校長が学校独自にクリエイティブにカリキュラムをたてている。

個に応じた学習環境が保障され、授業中にもカードをもって別の教室に移動する生徒もいた。

障害児は特別のスケジュールの必要性があるが、普通のクラスに入るときもあるし、入らないときもある。

3) 評価の基準

評価基準	A	100~93
	B	91~85
	C	84~77
	D	76~70
	E	70以下

テストは客観式4択が多く、基礎基本に厳選している。70点以下は留年になるので、対象の生徒には特別の授業をする等、学年末は先生も大変である。

昨年も優秀校として表彰されたと校長が自慢していたが、今年も一人をのぞいて全員合格したとメールを頂いた。

4) 総合学習はどうとりくんでいるか。

総合学習をintegral studiesと日本では訳しているが、ノースカロライナの総合学習はTheme studies(テーマ学習)と呼んだほうがいい内容であった。

Sherry校長が特別に6年生の先生集団との懇談を組んでくださり、Miles先生に英語をかみ砕いてもらって話しをさせてもらった。

話によれば、「第2次世界大戦」というテーマであれば、社会はその歴史的背景、戦争が起こった原因、国語は文学、詩、数学は軍事作戦の暗号の解読、理科は1940年代の発明(原爆など)それぞれのテーマごとに調べ学習をする。一つのテーマに対して、各専門の教科からのアプローチという点が日本の総合学習とはやや違うように感じた。ただ戦争をゲームの対象とする感覚には違和感を感じたのは私だけだろうか。(実際にやっている分厚い4教科の資料をいただいたが、それだけでレポートが書けるほどの内容だった。)

5) 生活指導について。

〈警官の常駐〉

学校には治安の維持のため、警官が常駐、校長と綿密に連絡をとっている。生徒の兄弟や卒業生などが多く、違和感はない。銃やドラッグが持ち込まれることも予想されるアメリカでは必要であろう。教師が法的に認められていない権限を行使できる人的配置はリスクの多い校区の学校では日本でも検討の余地がある。

〈スクールカウンセラー〉

学校のスタッフの一人である人と、カウンティを巡回しているカウンセラーとがいる。特別に参加させてもらった問題解決プログラム(Peacemaker Program)もスクールカウンセラーの引率で行なわれている。

〈服装規定(Dress Code)〉

1. 建物の中で帽子をかぶらない。
2. 男子も女子もタンクトップは禁止(Tシャツを下にきている場合以外)
3. パンツもスカートも長さはフィンガーティップルールに従うこと。(手の指先が届く長さ)
4. いつでも衣服にふさわしい下着を着ること。
5. いつでも靴をはくこと。(フリップフロップ=サンダルはだめ)
6. わいせつな言葉や、ドラッグやアルコール、性的な表現やシンボルが描かれたTシャツなどは着てはいけない。
7. 財布、腰の鎖は学校にもって来てはいけない。

〈Peacemaker Program〉(VTRに収録)

企業が開発したプログラム。暴力や不適切な行為を使わずに子どもたちがもっている問題を適切に行動する方法を勉強するために、生徒はこのプログラムに参加する。学校のスクールカウンセラーがコーディネートする。校長の計らいで特別に一緒に参加させてもらった。

指導員は若いお兄さんやお姉さんだが、心理学関係の大学院生などがやっているそうだ。校外学習で1日そこですごす。森林公園に作られたアスレティックフィールドのようなもので、丸太とワイヤー、タイヤとロープなどをいろいろな問題にみだてて一つ一つ問題を解決して進んでいく。

例) 丸太と丸太の間を川にみだて、つるされたタイヤを使い全員が安全にわたるにはどうしたらいいか。(体格、運動能力が様々な仲間たち)

例)高さが背の倍近くの丸いボールを巨人にみたく、巨人の目を覚まさせずに、かけられてる輪をとりはずす。

例) 90度に近い板壁を全員が協力してのぼる。誰が先に、誰があとに登れば、肩車などどう組み立てるか。

今年40%の生徒が参加した。3年間にはほぼ全員が参加する。

このプログラムに参加した生徒はピースメーカーのTシャツやジャケットをきて、学校へ戻ってからも学校の平和と調和のために行動する責任が持たされている。(たとえば生徒2人がもめたら生徒相談員としてこれらの相談にのる。)校長によれば、このプログラムは生徒に人気があり、経費がかかるのでやめることになったら、募金活動や奉仕活動をしてお金をつくと生徒たちから声があがったそうである。

6) Alternative School (代わりの学校、代替学校、補習校)

Pender Learning School(通学の更生施設兼補習校)

ノースカロライナ州のEOGテストで読解&数学テストに合格できない8年生クラス(中2)を対象にペンダー郡立の補習校である。

5つの異なったプログラムがRisk students(危険な生徒)の必要にあわせて作られている。補習校、学問校、LEPプログラム、特別に優秀なプログラムがあり、本当に個人の能力に見合ったきめ細かな教育をうけることができる。

生徒の危機的な必要性に的をしばり、普通の学校のシステムに戻ってもうまく適応できるスキルをつけることを支援する。

7) 授業に参加しての感想

五行詩の授業をみせてもらっているとき、たまたま百人一首のカレンダーをおみやげにもってきていたので、飛び入りで日本の和歌と百人一首の遊びについて英語で説明させてもらった。静かにきいて、うなずいてくれる人もいて、授業後サインをもとめられた。もうすこし国語の勉強をしておけばよかったなと思った。五行詩は行ごとに品詞やシラブルが決まっているのを初めて知った。グループ座席で次々に発表し、先生は必ず評価することばでほめていたのが印象的だった。

また国語の長文速読の授業で10ページほどを5分ほどで読み、本の内容についての質問(ハンドアウトは

既成のもの。記述式)にグループごとに答える授業では生徒になって参加したが、筋をおうのが精一杯で質問に答えるために読みなおす時間はなく、答えられなかった。

マイルズ先生の授業に参加させてもらい、日本からもっていった1中の普通の1日のVTR「すっぴん1中」を生徒たちにみせながら英語で説明した。生徒が強く反応したのは、登校風景で生活指導と当番の先生がおはようと登校指導している風景のあと、始業時間になって門をしめるときだった。「刑務所みたいだ」といった。そういえば、Topsail Middleは敷地も広く、校名を書いた門柱にあたる標識はあるものの、門などはりめぐらせられない広さで、セキュリティは職員のIDカード、警官、携帯電話、などで日本より万全にみえた。門を閉めるのは特別の場所で違和感があったのだろう。

もう一つはプールだった。学校内にプールがあること、水泳の授業があることに「うらやましい」と喚声があがった。クラブ活動も学校内でやってるのをみてめずらしがっていた。体育の授業をみせてもらったときに、「着替えないこと」「体操がきびきびしていないこと」「説明が多く実際動く場面が少ないこと」などが印象にのこったのが、彼らが日本のうちの学校をみてもびっくりすると思われた。

日本で作っていった授業でも使っているハンドアウトを使って、日本の学校とノースカロライナの学校の違いを書いてもらいながら日本の学校を紹介した。

学校に戻って職員室前に向こうの生徒が書いてくれた紙をはり各クラスの授業でアメリカの学校の紹介をしている。

この研修のその後、

- ① トップセイル中学校のマイルズ先生、シェリー校長先生、スクールカウンセラーのトニー先生とのメールでの交流。
- ② トップセイル中学校の数学のバルセック先生が1中を訪問。3年生総合学習、国際理解の「わたしの一番好きな場所」というタイトルで先生に校内を案内したり、数学の授業を一部英語でやってもらったりした。
- ③ 3年生の英語教科内選択の生徒の週1回の授業で自己紹介50人分メールで送信したが、ESLテストの直前で、そのあと夏休みにはいり、生徒か

らの返事は来なかった。

- ④ パルセック先生より数学の統計学の勉強にhow many ... ?の15の質問がきて、3年生40数名が返事のメールを送信。
- ⑤ 大阪の文化やたべものについて50数名が個人のメールをトップセールズのジャバンクラブあてに送信。
- ⑥ ジャバンクラブとグループメール交換。
- ⑦ インターネットのE-PALのページに双方の学校が登録し、先生学校の安全管理のもと自由にメールをシェアできるようセット。今後の発展を期待している。

3. おわりに

4月に帰国してから即、学校の新体制にのるべく、休み返上で新学期がはじまり、2002年の教育改革の試行の年で改革委員会など、校内の目の前の仕事で精一杯で十分にこのプロジェクトのまとめができなかったことが悔やまれる。

英語の教師であることで、資料だけでも研究室で1年間じっくり読んで翻訳して本にしなればもったいないと思うほど頂き、それを始めると少しも進まず、

自分の英語力不足にはがゆい思いだった。いつかこの資料を生かしたい。

またこのプロジェクトは両国の平和の上に成り立っていることを痛感させられた。アメリカの先生方の訪問の直前に、その訪問予定だった大阪教育大附属小学校で「児童殺傷事件」が起こり、多くの子供たちが犠牲になった。かつて思いもよらなかった多数の死傷者がでてショックだった。

さらに日本では2学期始まってまもない9月11日にニューヨークの世界貿易センタービルがテロによって突撃倒壊させられた。その日を境に世界の価値観が大きく変わった。

ブッシュ大統領のよびかけにもそのままのすることもできず、メールもなんと打てばいいのか迷った。すぐ悲しみのカードが届き、お悔やみのメールを送ったもののそのことをどうとらえるのか困った。

いやでも政治や経済の影響をもろにうけてしまう、学校間の交流。市内で初めて姉妹都市ではない学校との姉妹校提携にまだふみきれていない。国旗ひとつでもいろいろ考え方が違い、中学校はすんなりとはいかないようだ。しばらく生徒や先生同士のメール交換等を通して条件整備をしていきたい。